



No. 106 2021. 4. 19

明石市コミュニティ・スクールだより

人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクス

KOMIKOMISUKUSUKU

明石市教育委員会事務局学校教育課



コミスク TwitterQR

社会に開かれた教育課程 “オープン・シェア革命” に学ぶ



34歳で進化を続けるダルビッシュ有投手。箱根駅伝で“常勝軍団”に成長を遂げた青山学院大学陸上競技部。背景にあるのは、データの“オープン・シェア革命”。武器である変化球の投げ方や長距離に特化したトレーニング方法を惜しげもなく一般公開。そこから多くの選手が技術を学び、さらに進化した技術を学ぶという“成長の好循環”が生まれているのだ。また横浜 DeNA では、元選手中心だった人材登用を“オープン化”し、統計学や AI の専門家などを積極活用、選手強化に乗り出している。いかに個人や組織の能力を伸ばすか。企業の管理職や子育て中の親にもヒントとなる“スポーツ界の革命”を深掘りする。

「NHK クローズアップ現代+」ホームページより

NHKのクローズアップ現代+で今スポーツ界、特にメジャーリーグのダルビッシュ投手を中心に広がっている投球術や打撃術の情報を公開して行く“オープン・シェア革命”を紹介する番組が流れていました。

番組の中でダルビッシュ投手も、青山学院の原監督も、DeNAの戦略スタッフも、そして広島県の武田高校の野球部監督・選手の皆さんもトレーニング方法等をオープンにして、データ・情報の見える化を図ることにより自分の成長につながるだけでなく、全体のレベルアップにつながるということを共通して話されていました。

ダルビッシュ投手は技術の進化により“球速やボールの回転数、回転の軸と方向、変化の大きさや軌道などが客観的なデータとなり“見える化”されたことにより、「感覚」を共有することが可能になり、「…誰かが投げられているという事は、自分でも同じような体の動きをしたり、ボールのどこに、どういうふうな形で力を与えるか、どういうふうに出してくるかという

ことをわかれば、それは誰だって投げられる球なので。そこをより言語化して、具体的に、すべての球がすべての投手に投げられるようになるのが僕の夢」と話されています。また、そうした投球術を積極的にシェアし成長・進化中での去年、メジャーナンバーワン投手に贈られるサイ・ヤング賞を受賞したトレバー・バウアー投手は「共有しなければ、他人からフィードバックがもらえない。『こうじゃないのか？』という指摘や、『こうやってみたら？』という提案も得られない。共有をやめたら学ぶスピードが落ちる。それは損だと思う」と話されていました。

また、DeNAでは技術の進化の中で得られるようになったデータを活かすためにこれまで、元選手で構成するのが一般的であったチームスタッフの門戸をオープンにして、野球界の外の力を取り入れています。データ戦略チームのスタッフの経歴をみると、“チーム戦略部長＝元戦略コンサルタント、データ分析担当＝自動車部品メーカー・銀行員、動作解析担当＝大学院で動作解析を研究、投球分析担当＝元選手、AI基盤担当＝Web系エンジニア、AI研究開発担当＝大学院で映像系AIを

研究・画像認識を研究…”といった様々な分野から集まっています。そうしたスタッフにより集められ、解析・分析されたデータを選手・コーチとも共有し、フィードバックすることで個々の選手の能力を伸ばす取組が紹介されていました。

また広島県の武田高校でも”オープン・シェア革命”で選手のやる気を引き出す取組も紹介されていました。これまでの高校野球の指導に対する疑問があり、監督の経験や感覚で練習が決められ、指導でも理由や目的が説明されないことが多かったという思いが”オープン・シェア革命”に取り組みきっかけだったようです。そこで岡寄雄介監督は、課題と成果の見える化を進め、指導者と選手が、同じように数字に向かってやっていくといった仕組みをつくり、個々の現在地が分かるようにし、データをオープン化することにより選手自身が解決策を考えることをめざされたようです。さらに岡寄監督は、チーム全体のやる気を引き出すため、指導者の本音まで共有することに踏み出し、監督とコーチのミーティングの音声を、SNSを通じて選手に公開するところまで踏みこまれたようです。メンバーの選考をトップダウンで決めるのではなく、過程を選手と共有し評価をガラス張りした選考の様子も紹介されていました。

こうした動きに青山学院の原監督は次のように述べられています。

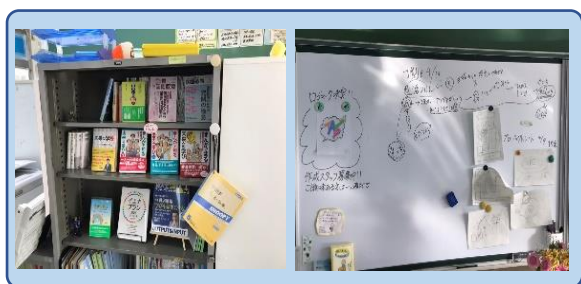
「情報化社会の中で、監督の経験則だけで指導していくのは、もはや時代遅れです。いかにその情報を利用していか。見える化していくか。そのことが指導者に今、求められてるんじゃないですか。威張り散らす指導に誰も選手はついてきません。そして今の若い世代の人たちはいくら厳しく指導しても、それが論理的でまっとうな手法だったら頑張ります。でもそれが理論性もなく、ただ理不尽な指導だったら学生はやりませんよ。より具体的に数値化して、見える化して、頑張らせる、その指標をつくってあげること、枠組みをつくってあげることが僕は大切だと思います。」

番組を観ながら、ここで紹介された学びは、「主体的・対話的で深い学び」を循環させながら自分自身だけでなく周りも成長させていくウェルビーイングそのものであり、こうした学びが学校教育にも求められているんだと改めて実感しました。また、“見える化”がこれからの教師の大きな仕事になってくるのではと感じました。“見える化”が“個別最適化”等を考えるキーワードになり、“オープン・シェア革命”には「開かれた教育課程」のヒントがあるように思います。

興味があればホームページだけでも見てみてください。(NHK クローズアップ現代+)

<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4534/index.html>

これも“オープン・シェア革命”では？



昨日「うちのラボ」という題名で写真が届きました。職員室の中にオープンな形でミーティングができるスペースとして作った“ラボ”が活用され始めたとの報告を頂きました。校内でのオープン・シェアだけでなく、学校枠をオンラインで越境しながら情報を共有することで学びがひろがり、深まるのではと思います。“放課後、職員室でとなりの席の先生と話をする感じで、他校の先生方との対話ができる。そんな中で学校・校種を超えたプロジェクトが生まれてくる”もう環境は整っています。そんな一步を踏み出したいですね。

もう一度トレバー・バウアー投手の言葉

「共有しなければ、他人からフィードバックがもらえない。『こうじゃないのか？』という指摘や、『こうやってみたら？』という提案も得られない。共有をやめたら学ぶスピードが落ちる。それは損だと思う」

(文責：北本)